

ソーシャルワークの専門性と社会政策へ態度

——1970 年代日本における社会福祉の専門性言説の分析から——

東京大学大学院 中野航綺

【1. 目的】

地域福祉を中心に社会政策が推進される中で、社会福祉の実践であるソーシャルワーク（以下 SW）の重要性が主張されてきた（社会保障審議会 2018）。並行して SW の重要性を説く社会政策が持つ社会像の歪みを指摘しながら、SW は社会政策と批判的に向き合うことの重要性が論じられている（三島 2017）。しかし、社会福祉と社会政策の本質を問う研究はその沈静化（岩崎 2011）が指摘されると共に、議論が盛んな時期においても、SW の視点から社会政策を問い関係性を論じるという視角は十分に採用されてこなかった。本研究では、社会政策と社会福祉を巡り議論が盛んに交わされた 1970 年代を対象に、社会福祉の実践である SW が社会政策に対して自己の専門性を規定し形成してきたのかを歴史社会学の観点から明らかにする。

【2. 方法】

ソーシャルワーカー（以下 SVer）の専門性はその専門職化過程で深く議論され、とくに専門教育の内容検討を通じて行われてきた（奥田 1992）。本研究では、1971 年より社会福祉教育の内容を議論してきた日本社会事業学校連盟の社会福祉教育セミナーを分析対象とする。社会福祉教育セミナーの会議内容を詳細に記した「社会福祉教育セミナー報告書」を主要な史料として分析を行う。

【3. 結果】

1970 年代における SVer の専門性を巡る議論では、英国で先行していた〈ソーシャルポリシー〉論が積極的に受容され、政策、制度にかかわる SW 実践の理論化が進められていた。1971 年から 1975 年の期間で、ソーシャルプランニングやソーシャルアドミニストレーションなど、ソーシャルポリシー領域の用語が頻繁に用いられていた。政策論と技術論に分離されてきた SW を統合し、社会福祉の専門性を体系化概念としてソーシャルポリシーが用いられていた。ただし、1975 年を過ぎるとソーシャルポリシー論は急速に停滞し、これを批判的に論じる意見に替わっていく。日本の社会福祉教育の未整備を理由にソーシャルポリシー教育を展開することへの限界が指摘されたことも、併せて確認された。

【4. 結論】

1970 年代の社会福祉の専門性議論において、政策論、社会福祉運動論、新政策論などの理論と同様に社会福祉の社会改良的役割が論じられ、社会変革を担う SVer 像が主張されていた。一方で、これらの理論がマルクス主義に強く規定されていた（古川 1998）のに対し、1970 年代前半に目指された社会福祉の専門性は、英国由来のソーシャルポリシーを引き受け、専門性を論じていたことが明らかとなった。またこうしたソーシャルポリシーの理解は、1970 年代後半以降ニード論を中心に展開されていく三浦文夫の社会福祉経営論の中で理論化が進められたソーシャルポリシー観（小笠原・平野 2004）とも異なる理論化である。SW におけるソーシャルポリシーの受容においては、SVer が社会政策に働きかけ社会改良を進めることが志向され、ソーシャルポリシーの枠組みを用いて社会福祉を主体的に実践することが模索されていた。1970 年代においては、思想背景が異なる SW とソーシャルポリシーを独特の様式で融合した実践の位置づけが取り組まれていたことが本研究から明らかにされた。